

在宅医療は 健幸医療

長尾 和宏

医療法人社団裕和会・理事長
長尾クリニック・院長



今回は熊本市在住の
主婦(61歳)からのご相談です。



昨年11月、86歳になる母が急に脳梗塞で倒れ、入院。た
まに単語での発語はあっても、ほとんど無表情で寝たきり
の状態のまま点滴を受けていた母でしたが、12月に硬膜
外血腫が見つかり、手術。その後、主治医からは何の説明
もないままに経鼻栄養となり、意識の回復は難しいだろう
との診断がありました。母は、自分が病気になる時は延命
治療はせずに自然に逝かせてほしいといつも言ってお
りましたので、せめてチューブをはずすことはできないの
でしょうかと病院に聞いたところ、病院からは、「一旦入れ
た経鼻栄養のチューブをはずすことはできないと言われま
した。そこで、父と夫と子供たち、家族全員で話し合い、主
治医に「母を退院させ、自宅で介護したいのですが」とお願
いしたところ「医師の立場から言えば、今の状態では退院
の許可は出せない。チューブを外すということは、薬も投
与出来ないということ。チューブを外せば、終わりは早い
と覚悟して下さい」。また病院からも「ご家族が決めたこと
に関して、病院はどうかは言えませんが、在宅介護は無
理でしょう」と言われました。以前、先生がどんな時にも
在宅介護は可能です、とおっしゃっていましたが、病院が
言うように在宅での介護は無理なのでしょうか。よろしく
お願いします。

お答えします！

呆れました。でもこれが日本の
病院医療の現状なのでしょうね。
同じ医師として恥ずかしいです。
結論から申しますと、貴方と全
く同じ状況にある患者さんを在宅
医療で何人も診ています。だから
何が問題なのかサッパリ分かりま
せん。病院の医師がそのように言
う理由はだいたい想像できます。
そのような患者さんが在宅療養し
ている姿を一度も見たことがない
からイメージがわかない。分から
ないので、とりあえず「できません
」と言っているのでしょうか。
病院で働く医療スタッフにも在宅
医療をもっと啓発しなければ、と
いう思いがより強くなりました。
鼻からチューブはいくらなんでも
可哀そうです。不快ですし、食
べられません。まして家に帰るこ
とを考えるのであれば「胃ろう」に
してあげてください。迷う理由は
ありません。

しかし全身状態が衰弱して終わりが近いと判断されるならば、注入する栄養剤の量を徐々に減らしていくことはあり得ます。倫理的に間違っていない。詳しいことは拙書「胃ろうという選択、しない選択」(セブン&アイ出版)に書きましたので参考にしてください。

もしも何らかの理由で在宅療養が困難な時は、胃ろう患者さんの療養の場として、特養、看護小規模多機能型居宅介護(カンタキ)などがあります。後者は自宅と行ったり来たりできます。またショートステイのロング利用で月に1日だけ家に帰ってこられる人もいます。

意識の回復を諦めてはいけません。たぶんウトウト眠っている時間が長いだけでしょ。長期間病院に入院しているとどうしてもそうなります。廃用症候群や意欲低下です。しかし時には覚醒させる薬剤も使いながら積極的にリハビリを行うことで徐々に意識レベルが上がります。反応性が良くなり意欲も出ることを時々経験します。だから現時点では、死ぬことよりも元気になることを考えるべきではないでしょうか。

もし意識レベルが上がってきたら、食べることを諦めてはいけませ

せん。お母様のような方で家に帰った途端にバリバリ食べた方は、はこれまでたくさん経験しました。嚥下障害の程度と原因などの詳細が分からないので断言はできませんが、一体誰が「一生食べられませんか」と決めたのでしょうか。その根拠はなんなのでしょう。主治医に聞いてみてください。私は生きるに食えることだと思っている、口から食えることを諦めません。

摂食嚥下に関する専門的知識を有するスタッフが協力して、たとえアイスクリュームだけでも口から食べさせてあげようと思います。ちょっとでも口から食べれたらお母様も貴方も生への意欲がわいてくるはずですよ。

そしていつかは、家の外に出してあげたい。散歩させてあげたい。旅行させてあげたい。温泉に入りたいと思えます。しかし現在の病院にいる限り難しいですね。だから胃ろうを造ってもらい、いったんは家に帰ってはどうでしょうか。

受け止めてくれる在宅医を「さ いごまで自宅で診てくれるいいお医者さん」(週刊朝日ムック)で探してください。よほどの田舎でない

限り必ずいます。もし介護負担が大きくて在宅療養が困難と感じたら、主治医やケアマネと相談して次の道を考えてはどうでしょうか。

いずれにせよ病院・施設か自宅かの二者択一ではなく様々な選択肢が用意されています。自宅と施設を行ったり来たりできる療養形態が介護保険制のなかでいくつ用意されています。しかし一般市民はあまり知りません。もしどこに相談に行けばいいのか分からないなら、たとえば西宮市の「NPO法人つどい場さくらちゃん」のような介護者を癒す場を探して地域の活きた介護情報をゲットしてください。

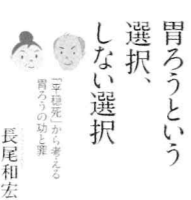
地域包括支援センターでもいいし認知症に定評のある開業医やケアマネでもいいでしょう。行き詰まったらいろんな専門家に聞くことが大切。堂々と助言を求めます。別に恥ずかしくありません。

100人に聞けば答えは100通りかもしれませんが、必ず解決してくれる医療・介護関係者に会えばいいです。

大切なことは、大切なお母さまの問題を貴方一人で抱え込まないことです。

著者：長尾和宏
出版社：セブン&アイ出版
価格：1,500円(税別)

老衰、認知症終末期、どう生きる?口から食べられなくなった時、病院で求められる「胃ろう」という提案に、あなたと家族はどう答えるべきか?胃ろうは「過剰な延命措置」か?



胃ろうという
選択、
しない選択

監修：長尾和宏
編集：朝日新聞出版
出版社：朝日新聞出版
価格：1000円(税込)

自宅に医師が訪問診療をしてくれる「在宅医療」のすべてがわかるガイド。認知症、がんなど疾患別のケースを在宅医が解説。実績がある診療所、病院全国約2700施設を看取り件数とともに掲載。



さいごまで
自宅で診てくれる
いいお医者さん

きらめき⁺プラス Volunteer

2020 February Vol.82



障害があろうがなかろうが自分しだい

中嶋 涼子 × 佳山 明

腸内環境を整えることが大事

昆野 昌俊 × 岸本 佳子